るをいへる歟、又かずはかづにて和の義にや、

〔大上臈御名之事〕女房ことば

一さい　御まはり

〔海人藻芥〕内裏仙洞ニハ、一切ノ食物ニ異名ヲ付テ、被召事也、一向不存知者、當座ニ迷惑スベキ者哉、〇略中

御菜ヲバヲメグリト云、常ニヲマハリト云ハワロシ、〇略中

毎日三度ノ供御ハ、御メグリ七種、御汁二種ナリ、御飯ハワリタル強飯ヲ聞召ナリ、

〔貞丈雑記六飲食〕一御まはりとも御めぐりとも云は、めしのさいのこと也、又さいといふ、字菜を用るは誤なり、飡の字を用ゆべし、めしのさいとよむ字なり、然れども俗に通用するは菜の字なり、菜は野菜の菜也、さいと云は本はそへなり、めしにそへてくふゆへなり、そへといふことをいひ違てさいとも云也、さいのことをあはせものとも云、古き詞也、源氏物語、清少納言枕草子等に見たり、

〔俚言集覧世〕膳まはり　御所詞に菜をオメグリと云、海人藻芥に見ゆ、俗にオマハリと云、此ハ誤なりと云り、然ども此膳マハリのまはりはメグリの義にて一意也、

〔梅園日記四〕めぐり

玉勝間つらゝ椿のまきに、いはゆる菜をば昔はあはせといへり、清少納言枕冊子などに見ゆ、又伊勢神宮の書にまはりとあるは、伊勢の言歟、此國の今も山里人などまはりといふ所あり、又枯野のすすきの巻に、菜をばまはりといふこと、大神宮年中行事に御廻八種とあり、〇圖略　按ずるに伊勢國のみの言に非ず、京及び筑後などにてもまはりといふとぞ、海人藻芥云、御菜ヲバメグリト云、常ニオマハリト云ハワロシ、四條流庖丁書云、タコキリモルベキ事、飯ノ御回ナラバ、如何ニモ薄ク丸ク可切、大上臈御名之事云、女房ことば、さい御まはりなどあるにて知べし、扨まはりはめぐりの俗言也、菜をあかいへるは、古書を見るに、